

ARTIST NO KOSODATE?

アーティストの子育て

子育て中のアーティスト12名の声

インタビューから支援について考える

喜田早菜江（藤沢市アートスペース 学芸員）

インタビュー調査について

藤沢市アートスペース（FAS）は「若手アーティストの創作活動に対する支援」を運営目的の一つに掲げていることから、20～40代のアーティストと関わる機会が特に多くあります。この世代には、子育て中の人も少なくありません。子育ては一旦始まると長期に渡って生活全般に影響し、アーティストによっては時間の使い方、制作場所、制作方法、キャリア形成にまで波及します。けれども、その実態は表立って語られることはあまりなく、依然として家庭内の問題、あるいは個人の選択の問題として矮小化されがちです。

そこで、まずは子育て中のアーティストが、制作と子育ての両立において何に直面し、何を必要としているのかを把握することが、よりよい支援の実現につながるのではないかと考えました。そして2022年7月～12月にかけて、計12名に対し個別に聞き取り調査を実施しました。具体的には、先行研究を参考に共通の質問項目を設け、オンラインや対面で一人当たり1～2時間かけてインタビューを行いました。調査の対象としては、FASが開館以来これまでに実施してきた企画展やワークショップ等に関わったアーティストの中から、男女問わず子育て中の人を任意で選び、協力を依頼しました。すでに一定の信頼関係を築いている間柄であるからこそ話してもらえた内容もあるのではないかと想像します。また、FASのことを知っている立場から、あったらよいと思う具体的な支援策を提案してもらうこともできました。12名のアーティストが語った内容は文章化しましたので、ぜひご覧ください。

インタビューをして分かったことは、大きく分けて二つあります。

一つ目は、それぞれのアーティストについて、意外と知らないことが多かったということ。過去にお付き合いのあるアーティストたちを対象にしているの、既にお人柄や作風については把握しているつもりでした。けれども、どうやって制作時間を捻出しているかということや、子どもの存在が作品にどんな影響を及ぼしているかということは、仕事上の姿だけでは見えづらく、プライベートな領域に踏み込んで、聞き出そうとして初めて引き出せる類のことなのです。ですから、時間をそんな風にやりくりしていたのかとか、作風の変化の背景にはそういう理由があったのか、という驚きがありました。

そして二つ目は、アーティストたちは、それぞれのやり方で子育てと向き合っているのだということ。こう書くと当たり前のようですが、改めて確認することができました。一口に子育てと言っても、子どもの年齢や人数、個性によって必要なケアの内実は違うし、個々のアーティストが生活する環境や、制作する作品の形態もまちまちです。そうしたさまざまな条件のもと、子どもの成長とともに刻々と変化する現実はどう対処するかを考え、試行錯誤する姿が浮かび上がってきました。どれ一つとして同じものはありません。よって、ある人の解決策が、ただちに別の人にも当てはまるというものではありませんが、個々の奮闘ぶりは何らかのヒントを与えてくれることでしょう。とりわけこれから子育てを考えているアーティストにとって、先を照らす灯の一つになれば願います。そして、子育て中のアーティストとかかわるさまざまな人にとっても、彼らとどう接していけばよいかを考える材料になるのではないかと思います。

アーティストの現状と子育て

一般に、アーティスト業だけでは収入が不安定だったり十分ではなかったりするために、多くのアーティストは別に仕事を掛け持ちしています。昨今、労働者としてのアーティストの待遇を改善する必要性が指摘されるようになってきましたが、問題は収入に限らず、育児環境にも及びます。個人事業主や自営業者であるアーティストには、制度としての産休や育休はありませんし、出産手当金や育児休業給付金も受け取れません。また、認可保育園の入園申請時には審査が課され、保護者の就労時間や体調などさまざまな家庭状況が点数化されて、点数の高い順に優先的に入園できる仕組みがあるのですが、個人事業主や自営業者は会社員に比べて保育の必要性が低いとみなされがち（*1）で、子どもを保育園に預けにくいのが現状です。

今回のインタビューでも、子どもを保育園に預けやすくするために、また生活を安定させるために、あるいは制作費を捻出するために、アーティスト活動とは別に仕事をしているケースが多々ありました。そして、子育て

に手間と時間とお金がかかる状況では、十分な収入を伴わない制作活動は後回しにせざるを得ず、制作したいけれど子どもをもつ前と同様にはできないという苦しい胸の内在が吐露されました。加えて、相変わらず保育園の待機児童問題は存在し、制作活動への復帰を遅らせる要因になっています。小学校に入学して以降も、学童保育に預けられるかどうかで左右されます。

それから、子育て中であることを理由に「配慮」がなされ、展示などの発表の機会が減るという声も上がっています。同様のことは一般企業でもみられ、小さい子どもを抱える社員に対し、周囲が仕事の負担を減らしたり昇進を見送ったりするアンコンシャスバイアス（無意識の思い込み、偏見）が問題になっているところ です。

このほか、アーティストに特有の問題としては、家族連れで利用できるアーティスト・イン・レジデンスのプログラムが少なくキャリア形成に不利であることや、子連れでの制作に対する周囲の理解不足も浮かび上がってきました。

一方で、子育てに伴う生活上の変化や制約を引き受けつつ、子育て自体を楽しんだり、子どもの存在が制作の動機になったり、子どもがいるからこそ新たな制作手法を見出したりするケースも散見されます。これは、困難な状況を意識的にプラスに変えたというよりも、子どもを育てながらできる範囲で小さな調整を重ねた結果辿り着いたものであることが多いようです。

(※1) 点数化の基準は自治体によって異なる。藤沢市については令和5年3月現在、特に個人事業主や自営業者が不利になる点数表を設定してはいない。

子育て中のアーティストへの支援

今回のインタビューでは、子育て中のアーティストの視点から、FASにあったらよいと思うサービスについて提言をもらいました。アーティストとしてFASの展覧会やワークショップに参加する場合と、一般の来館者としてFASを利用する場合の両方を想定して、思いつくものを挙げてもらったところ、託児サービスをはじめとして具体的な要望を聞くことができました。中には、FASに限らず他の文化施設や美術業界全体に広げて考えられる有用な提言もありました。今後、できることから一つひとつの問題に向き合っていくことが、忙しい時間を割いてインタビューに答えてくださった協力者の方々への恩返しとなり、引いてはアーティスト全体への支援につながると考えています。

すぐに実践できることとして、この調査を機にFASでは、単発のワークショップを企画する際に、子育て中のアーティストにも積極的に講師を依頼するようになりました。FASが毎年公募により滞在作家を選出して実施しているアーティスト・イン・レジデンスプログラムの「Artists in FAS」をはじめ、その他の企画展やイベントにおいても、今後は、参加アーティストの困り事を都度お聞きし、市の子育て関連を担当している部署とも連携をはかりながら考えていきたいと思います。

子育て中のアーティストの困り事には、多くの人に当てはまり一般化できるものもあれば、すこぶる個別なものもあります。ですから、制作や展覧会、イベント等の仕事においてアーティストを支援する側に肝要なのは、まずはその時々アーティストの状況を理解しようと努め、よりよい仕事環境を作ろうと改善し続けることだと言えるでしょう。

インタビューの中で複数人から聞いた言葉が印象に残っています。作家活動を減速させたり断念したりするのを「子どものせいにはしたくない」という言葉です。子育て中のアーティストを精神的に追い詰めるものとして、子どもがいても、仕事の間では他の人に迷惑をかけず、もてる力を最大限発揮するのが当たり前だという社会通念が厳然としてあるように思います。そんなプレッシャーを感じずに社会生活を送れたらどんなにいいでしょうか。まずはアーティストを支える側の私たちが意識を変えていくことが求められます。

調査概要

実施期間	2022 年 7 月～ 12 月
調査対象	FAS が 2015 年の開館以来これまでに実施した企画展に参加したり、ワークショップに講師として関わったりしたアーティストの中から、男女問わず、中学生以下の子どもをもつ人を任意で選出した。計12名にご協力いただいた。今回ご協力いただいた方以外にも該当者は多く、是非話を聞きたかったのだが、実施期間内に順次調査を終えられたのが結果として12名であった。
調査方法	オンラインや対面で、あらかじめ設定した「共通の質問事項」に沿って一人当たり 1～2 時間かけて筆者がインタビューし、内容を書き起こした。なお、回答者の精神的負担を軽減するため、語った内容の公開は匿名を前提とした。
共通の質問項目	先行研究(*2)を参考に、以下のように 19 個の共通の質問項目を設けた。項目設定にあたっては、回答者 No.1 のアーティストの協力を得て、質問の意図が明確に伝わるよう検討した。 (*2) 高橋律子「子育て中の女性アーティストに関する実態調査」『まちと暮らし研究』No.29、2019 年、60-70 頁。

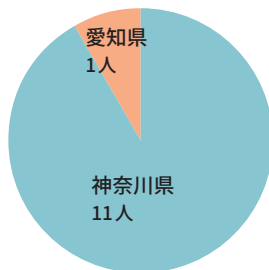
- 01 お住まいの都道府県は？ 海外の方は国名を教えてください。
- 02 年齢は？ 20 代／30 代／40 代／50 代
- 03 性別 男性／女性／答えたくない
- 04 お子さんは何人ですか？ 1 人／2 人／3 人／4 人以上
- 05 一番小さいお子さんの年齢は何歳ですか？
0～3 歳／4～6 歳（未就学児）／小学校 1～3 年生／小学校 4～6 年生／中学生以上
- 06 作家活動以外に仕事をされている方は、可能な範囲でお仕事の内容を教えてください。
- 07 保育園・幼稚園などの保育サービスを利用していますか？または過去に利用しましたか？
☐ はい ☐ いいえ
- 08 (07)が「はい」の場合、預け先は？
☐ 保育園 ☐ 通常保育 ☐ 一時保育・☐ 認可 ☐ 認可外 ☐ 幼稚園 ☐ ファミリーサポートセンター ☐ その他
- 09 お子さんをもった後、作品制作時間はどう捻出していますか？〈複数回答可〉
☐ 保育園や学校に行っている間 ☐ 睡眠時間を削る ☐ 子どもが寝てから ☐ 早朝 ☐ 実家・親に預ける
☐ 配偶者に預ける ☐ 仕事の合間 ☐ 仕事が休みの日 ☐ 捻出できない ☐ その他
- 10 一日のうちで、①育児にかかる時間、②作家活動にかかる時間、③作家活動以外の仕事にかかる時間は、お子さんをもつ前と現在とではどう変わりましたか？およその時間を教えてください。
- 11 お子さんをもった後、作品制作の環境(場所)は変わりましたか？
- 12 お子さんの存在が作品に影響し、作風や扱う素材、制作方法などは変わりましたか？
- 13 コロナ禍が子育て中の制作に何か影響を及ぼしましたか？
- 14 子育て中の制作において、どのような工夫をしていますか？

- 15 子育て中の制作について身近に相談できるアーティスト仲間等はいいますか？
- 16 今現在、作家活動をするとしたら、どのようなことをやってみたいですか。
☐ リサーチ ☐ 制作 ☐ 展示 ☐ ワークショップ ☐ アーティスト・イン・レジデンス ☐ その他
- 17 作品制作を継続するためには何が必要だと考えますか？
 特に優先順位の高いと思うものを2つ選択してください。
☐ 家族の協力 ☐ ひとりの時間 ☐ 収入 ☐ 美術に関する仕事への就労 ☐ 仲間の存在 ☐ その他
- 18 FAS にどのようなサービス・支援・配慮があれば、
 子育て中の作家活動がよりスムーズにいくと思いますか。
 例) 託児 / ゆとりのある搬入・搬出スケジュール / 作家同士の情報交換会 / 子育て経験のある作家の体験談を聞く
- 19 お子さんの手が離れたら、どのように活動をしていきたいですか？

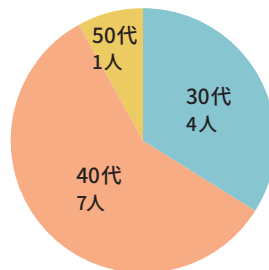
調査結果の分析

過去に FAS の事業に関わったアーティストの中から子育て中の人を任意で選んで調査への協力を依頼した。依頼者を選ぶ際は、男性も排除せず、多岐に渡るアーティストの子育ての実態を把握するため、なるべく手掛ける作品ジャンルや表現手段が偏らないようにした。よって、特定の条件をもつ層を中心に上げようという意図はない。対象を女性に限定しなかったことで、育児に積極的に取り組んでいる男性の事例も聞くことができた。

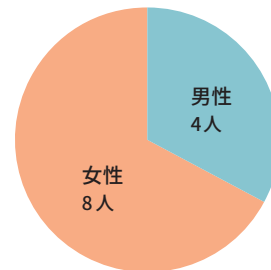
01
住まい



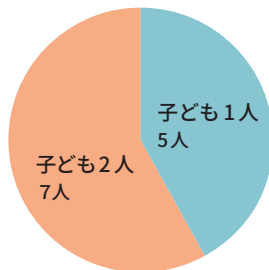
02
年齢



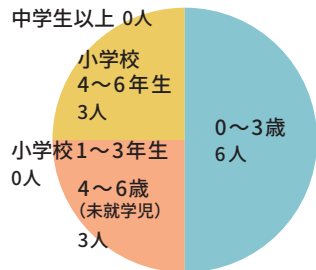
03
性別



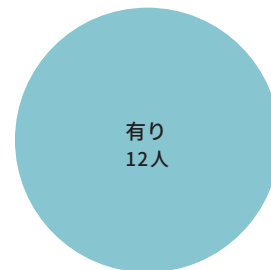
04
お子さんの数



05
一番小さいお子さんの年齢



07
保育サービスの利用の有無



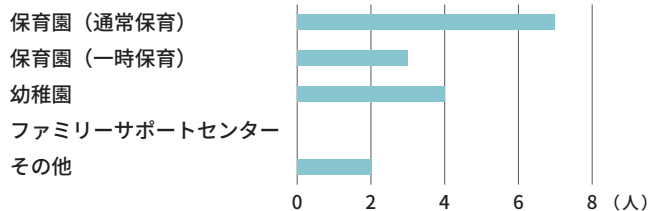
結果として、(01)FAS が位置する神奈川県内を拠点とするアーティストが9割を超え、(02)30～40代が9割強を占め、(03)男女比が1:2で、(04)お子さんが2人いる人は6割に迫り、(05)一番小さいお子さんの年齢が0～3歳だという人が半数に上り、(07)全員が何らかの保育サービスを利用したことがあると答えた。こうした前提をふまえ、以下、(08)以降の回答についてみていく。

(08) 過去に利用したあるいは現在利用している保育サービス（複数回答可）としては、保育園の通常保育（7人）が最も多かった。その他、通常保育を希望したが待機児童問題により入園できず、一時保育を利用せざるを得なかった例も3件あった。また、認可保育園に入りやすくするために、それに先立って認可外保育園に通わせた例や、認可保育園を申請したが入れず、やむなく認可外保育園

に通わせた例もあった。一方で、保育園にはあえて通わせず3歳頃まで手元で育てたり、自らの教育方針に合致する保育のかたちを模索したりする例もあった。利用する保育サービスの選択の背景には、本人の考え方だけでなく、作家活動以外に仕事に就いているかどうかや家族の協力体制なども大きく影響している。

08

利用している(した)保育サービス

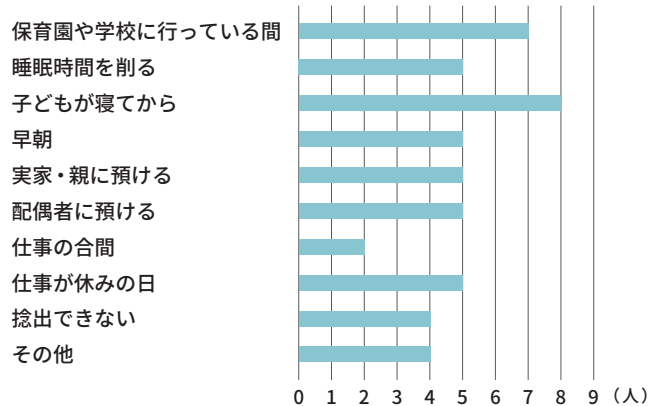


(09) では作品制作時間の捻出方法（複数回答可）を聞いた。小さな子どもが同一空間にいたら、制作にはとても集中できない。場合によっては制作に使用する材料が子どもに害を及ぼす危険性もある。比較的多いのは「子どもが寝てから」（8人）と「保育園や学校に行っている間」（7人）であり、ほとんどの回答者は複数の方法を組み合わせで何とか時間をやりくりしていた。中には、実家は近いが頻繁に預けるのは気が引けるので最低限にしているという例や、どうしても間に合わない時は罪悪感を抱きながら作家活動以外の仕事を休んでいるという例もあり、自分の時間を削るだけでは

済まない場合に、気を遣ったり肩身の狭い思いをしたりしながら時間を捻出している様子が窺えた。また、1歳の子の育児に手がかかるため、現在はまったく制作ができないという例もあった。一方で、作品のアウトプットの仕方を考える際に、子どもの意見を取り入れることでプラスにしているというケースもあった。制作している作品によっても、子どもの年齢や個性によっても、状況は変わってくる。

09

作品制作時間の捻出方法

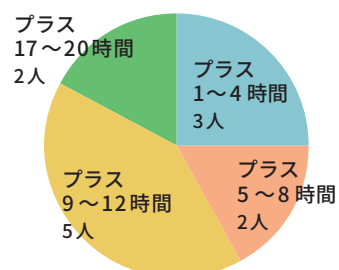


(10) では一日当たりの①育児にかかる時間、②作家活動にかかる時間、③作家活動以外の仕事にかかる時間のそれぞれについて、子どもをもつ前と現在の具体的な数字を聞いた。多くの回答者が、日によって違うため厳密ではないと断った上で答えてくれた。

①育児にかかる時間(*3)は、当然ながら子どもをもった後に初めて育児時間が発生するため、子どもをもつ前と比較して必ずプラスになる。最も多かったのは、プラス9～12時間（5人）であった。全体としては、子どもがまだ小さく、保育園の通常保育を利用していない未就園児ほど育児時間が長い傾向にあり、最長は一日18時間（2人）だった。これは睡眠時間以外はずっと子育てに費やしている状態である。逆に、一番小さい子どもが小学校高学年の2人は、プラス1.5～2時間程度に抑えられていた。

(*3) 平日と休日に分けて回答している場合は、{(平日の育児時間×5日)+(休日の育児時間×2日)}÷7日で平均値を割り出した。小数点第2位は四捨五入。

10-① 育児時間



②作家活動にかかる時間は、「マイナス 6 ～ 10 時間」(2 人)と「マイナス 1 ～ 5 時間」(6 人)を合わせて、全体の 67% が減っている。

①育児にかかる時間の増加が大きいと、②作家活動にかかる時間の減少幅も大きくなる傾向にあり、一定の相関関係がみられる。ただ、一番小さい子どもが小学校高学年である 2 人は、3 ～ 5 時間増えていた。これは、地域の子どもたちのための作家活動を増やした例である。

③作家活動以外の仕事にかかる時間は、「マイナス 6 ～ 10 時間」(4 人)と「マイナス 1 ～ 5 時間」(5 人)合わせて全体の 75% が減っている。中には増えている人(1 人)もいるが、保育園に入園させるために新たに仕事を始めたケースである。②と③の減少の理由は、子育てのために仕事を辞めなおかつ作家活動もほぼ休止している、仕事を変えたり絞ったりして時間を減らしなおかつ作家活動も減らした、収入減を避けるために仕事はさほど削れないがその分作家活動を減らしたなど様々であり、一括りにはできない。

(11) は子どもをもったことで制作環境(場所)が変わったかどうかを聞く設問である。変わらないとする回答(9 人)が多いが、変わった人(3 人)の中には、子どもを保育園や幼稚園に預けやすい場所にアトリエを引っ越したという例があった。引っ越さなければ制作自体を続けられなかったという切実な理由からである。また、自宅から遠く離れた地方に滞在してインスタレーション作品を制作していたが、子どもが小学校に上がってからは制作場所が近場へと変わったという例もあった。子どもを連れてのアーティスト・イン・レジデンスは大変な労力を必要とする。それでも子どもが就学前までは何とか親や現地の人の手を借りながら遠方まで出かけていけたが、子どもが小学生になると学校を休ませるわけにはいかないので、地方での制作は諦めたという実態が明らかになった。子どもを保育園や幼稚園に預け始めるタイミングだけでなく、子どもが義務教育を受ける歳になるということも、アーティストにとっては一つの転機になり得る。

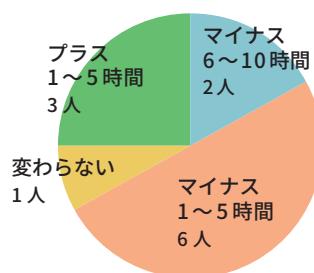
(12) では子どもの存在が作品に影響し、作風や扱う素材、制作方法などが変わったかどうかを尋ねた。83%(10 人)が「変わった」と答えた。変化した具体的内容を 4 つに大別すると、以下のように整理できる。ただし、1 ～ 4 はそれぞれ別個にあるのではなく、互いに密接に結びついている。

【1. 作風の変化】子ども向けの本やアニメが作中に登場するようになった / 表現が柔らかくなった / 子どもが遊んだ折り紙を再利用した / 具象画から抽象画になった / 子どもに見せるために遊びで描いた技法が面白くて今も続けている / 絵本作りを始めた

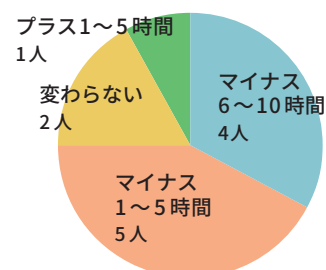
【2. 制作方法の変化】細切れの時間を使って制作するようになった / 使う色数を絞るようになった / 早く描くことができ狭いスペースでも作れる作品になった / パレットを使わず絵具を直接画布の上に出すようになった / 大きな作品を作れなくなった

【3. テーマの変化】生と死や命の繋がりを主題にするようになった / 子どものいる日常の中で気づいたことを形にするようになった

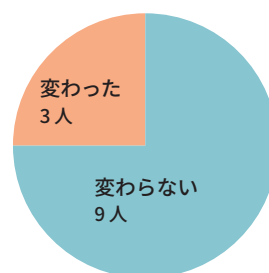
10-②
作家活動時間



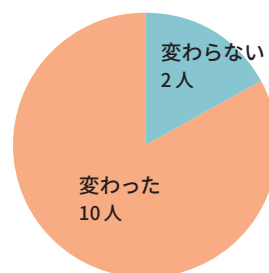
10-③
仕事時間



11
作品制作の環境(場所)



12
作風や制作方法



【4. 気持ちや姿勢の変化】関心が美術から建築やデザインに移った / 制作に専念してこれまでよりも大幅に手をかけ大きな作品を制作するようになった / できるだけ自然に還る素材を使いたいと思うようになった / 分かりやすさをより追求するようになった

「2. 制作方法の変化」では、現実的な問題として子育てに手間と時間とスペースを取られることから、作業効率を上げるために、短時間で手早く制作できる方法へと徐々に変わったという声が多く聞かれた。また、「4. 気持ちや姿勢の変化」では、子どもが身近にいることで興味の対象や心境に変化があり、それが制作方法やテーマの変化にもつながっている実態が浮かび上がってきた。全体としては、自らの置かれた環境に適応すべく各々が手探りで少しずつ試していった結果変化していたという印象である。

(13) コロナ禍における子育て中の制作への影響としては、「通っている保育園や学校などで感染者が発生するたびに1・2週間程度休みとなり、自宅待機となった子どもの世話のために制作や仕事が滞った」というような声が多かった。また、「高齢の両親に子どもを預けづらくなった」という実感も寄せられた。それから、「展示を間近に控えている間は家族と別の空間で食事するという対策をした」ケースもあった。これらのことは、アーティストに限らず似たような経験をした人が多いのではなかろうか。

中には、コロナ禍で不自由を強いられている子どもたちに向けての作家活動として、オンライン上で作品を展示・鑑賞する企画を立ち上げたり、里山でのびのび遊べるようイラストマップを作ったりした事例があった。

その他、子育てとは直接関連しないものの、コロナ禍によって、主宰しているアーティスト・ラン・スペースやアートスクールの運営計画を見直さざるを得なかった例や、予定されていた展覧会が開催されなくなったり延期されたりしたといった実害もあった。逆に、コロナ禍だからこそ癒しが求めているのか展示やワークショップのオファーが増えたというケースもあった。

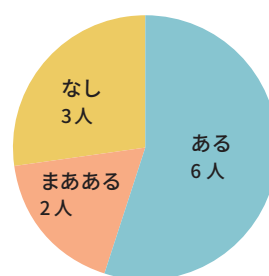
(14) 子育てと制作の両立のためにどんな工夫をしているかを問う質問では、様々な実践例が示された。子どもの年齢によっても対処法は異なるようだ。(12)の回答内容と重なる部分もあるが、重複を避けて具体例を挙げると、「制作場所に入らないよう子どもに強く言い聞かせる」、「子どもが寝ている間が一番制作できるので、日中たくさん遊ばせて疲れさせる」、「自宅を長く留守にしなくて済む仕事に比重を移す」、「地域住民の手を借り、子どもも巻き込んで制作する」などの他、自分の移動先に子どもを同伴し、展覧会、イベント、打合せ、材料の買い出し等に連れて行く例が多かった。

また、「子どもと一緒にいる時は制作できないが、作品に使えるものはないか頭の片隅で考えたり、気になったことをスマホで写真を撮ったりメモをとったりして素材を集める」、「授乳しながらパソコンに向かって仕事する」、「子どもが寝ているそばで手元だけ明るくして作業する」、「子どもを絵具で遊ばせている間に作業する」など、家の中で子守をしながら制作（やその準備）をしている様子が窺えた。

その他、精神面での工夫として、気持ちを切り替えて「今は手がかかる時期だが、それも一時的なものだから、制作を断念して子育てを楽しむ」、「自分の制作費を子どもに回した方がいいのではないかと考えることも多いが、制作を続けなかったことを将来子どものせいにしてしまわないよう、悲観的にならないように気をつけている」と、葛藤しつつもモチベーションを保つために懸命に努力している姿もみられた。

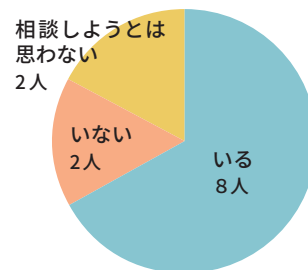
こうして、子どもを抱えながらも何とか制作に向かおうと奮闘する一方で、やはり一人になれる時間がないと制作が進められないという声もあり、両立の難しさが改めて浮き彫りになった。

13
コロナ禍の影響の有無



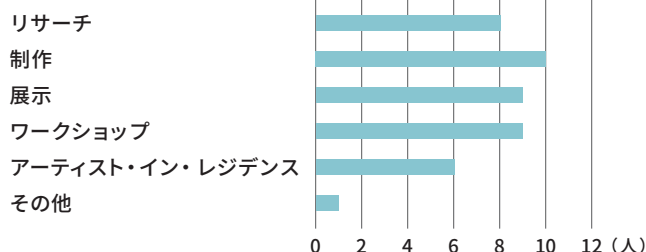
(15) では、子育てをしながら制作をしていく上で相談できる人が身近にいるかどうかを尋ねた。67%が「いる」(8人)と回答した。アーティスト仲間である友人はもちろん、同じくアーティストである配偶者が相談相手になっているという人も複数いた。また、特段何かを相談したいとは思っていないものの、子育て中の作家同士で情報交換ができればと願っている人もいた。アーティスト特有の悩みを共有できる人の存在は、制作を続けていこうとする時に力になるものだろう。相談したい時にできればよいのだが、立場がそれぞれ違うことや相手の時間を奪ってしまうことに気兼ねして、昔ほど気軽に相談できなくなったという声も聞かれた。

15
相談できる人の有無



(16) は今現在作家活動をするとしたら何をやってみたいかを問う質問で、「リサーチ」「制作」「展示」「ワークショップ」「アーティスト・イン・レジデンス(AIR)」「その他」(複数回答可)から選んでもらった。現時点ですでに実行できていることも含めて、やりたいことを挙げてもらったが、ほとんど全部を選択する回答者も多かった。よって、やりたいけれど現状できていないことについて尋ねた方が、支援を考える上では効果的だったかもしれない。

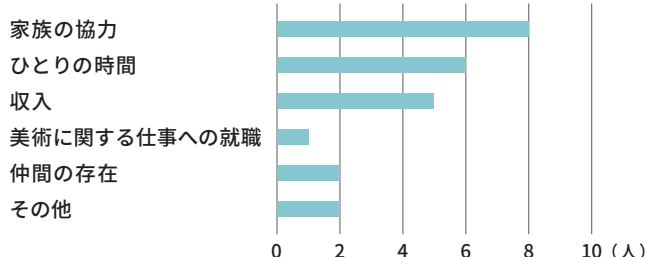
16
今何をやりたいか



やりたいけれど現状できていないものを抽出すると、「展示」(1人)、「AIR」(3人)だった。「AIR」は美術作家の間では希望する人が多いが、比較的長期間に渡って自宅を離れることになるため、子育て中のアーティストにとってハードルが高い。配偶者も仕事があるため子守を全面的に任せられない、自らも仕事を長期で休めないなどの理由から、諦めざるを得ない状況であることが明らかになった。

(17) は制作を継続するために必要だと考えるものを「家族の協力」「ひとりの時間」「収入」「美術に関する仕事への就労」「仲間の存在」「その他」から上位2つを選ぶ質問である。どれも同じくらい大事と迷った末に、「家族の協力」(8人)、「ひとりの時間」(6人)、「収入」(5人)を挙げる回答者が全体の約8割を占めた。中でも、「家族の協力」と「ひとりの時間」を挙げたのは0～3歳の子どもをもつ人が多く、やはり子どもが小さいほど育児に手が

17
制作を継続するために必要なもの



がかかるため、人の手と自分の時間を欲していると言える。「収入」については、経済的なゆとりがあれば、制作費が捻出できるし、託児サービスを利用して作家活動の時間を捻出することも可能になるという声が複数あった。「その他」としては、意欲や目標など制作へのモチベーションを高める要素が挙がった。

(18) では子育てをしながら作家活動をする上で、FASにどんなサービス・支援・配慮があればよいと思うかを問うた。最も多かったのは、託児サービスの提供(5人)である。現状、FASでは託児サービスは提供していない。しかし、滞在制作・打合せ・展示作業・イベント時等に、近くで子どもを預けることができれば、子どもの預け先がなくてアーティストとしての仕事を躊躇せざるを得ないという状況は回避できるだろう。多くの保育園や学校が休みとなる土日祝日にイベントを開催することが多いことから、託児サービスが求められていると推測さ

れる。(17)の設問で、制作を継続するために必要なものとして「ひとりの時間」や「収入」を挙げる回答者が多かったことから、無料あるいは安価な託児サービスへの期待は高いと言えるだろう。それがあれば、アーティストは子守から一定時間解放されて制作に集中でき、強力な作家支援となる。

また、一般的にアーティスト活動は収入に結びつきにくいために趣味の領域とみなされがちだが、託児サービスが受けられるということはアーティスト業がきちんと仕事として認識されることなので歓迎するという意見もあった。社会全体で意識改革をする必要があろう。

この他、複数寄せられた要望は、ゆとりのある搬入搬出スケジュール(3人)、子育て中の作家の交流や情報交換の場の創出(3人)、子どもが自由に遊んだり工作したりできるスペース(2人)である。

また、周囲は子育て中のアーティストに対し、今は忙しいだろうだから仕事を依頼しないでおこうという「配慮」をしがちであるが、子育てをしていない作家と平等に仕事の機会を与えてほしい(1人)、子育て中だからこそ仕事を依頼してほしい(1人)という声もあった。そうすることで、仕事復帰が促され、長期的に見て作品の質の向上につながると思う。FASのようなアーティストを支える側に必要なことは、アーティストがたとえ子育て中であっても臆せずどうすれば仕事をしやすい環境が整えられるかを共に考え、柔軟に対応することであろう。FASでは、計30日以上滞在を求めるAIRプログラムを毎年実施している。今回の子育て中のアーティストによる滞在制作についての経験談や要望は、滞在作家の支援の在り方を考える上で大きなヒントを提供してくれる。回答者の中には、複数回子どもを連れて地方に出かけたが、その度に現地で子どもの預け先を探すのに難儀したという事例があった。結局実母に滞在先まで来てもらうことでしのぐことが多かったようだ。他の回答者では、地方に滞在した1か月のうち1週間は子どもを保育園に預けることができたという事例があった。受け入れ態勢として託児サービスを用意するというのは素晴らしい取り組みである。ただ、残り3週間は、制作は結局子どもが寝た後の夜間に進めるしかなくて苦労したと言う。他にも、AIRをしたいが、子どもが小さいため家族で受け入れてもらえるところを探さなくてはいけないとか、短期のレジデンスなら参加できるかもという声もあった。これらのことから、国内ではまだほとんど例がないが、全滞在期間に渡って託児サービスが受けられるAIRプログラムの構築が必要であろう。海外ではすでに実施例がある。加えて、AIRに参加するために仕事を休んだり辞めたりせざるを得なければ、収入が減って生活が困難になる。育児やアーティスト業以外の仕事と両立しやすくするために、例えば2週間程度の短期のプログラムを設けることも有効かもしれない。

(19)制作や趣味の時間を増やしたい、AIRに挑戦したい、海外で生活してみたいなどの意見が多かった。子育てに伴って抑制している部分が現れた。

以上の結果から言えるのは、今回の回答者には子育てによって生活に変化が生じなかった人はいないということである。それぞれに工夫と調整を重ねて子育てのための時間を捻出し、場合によっては作風や制作方法、テーマの変化も経験し、仲間との付き合い方やキャリアの構築についても以前とはスタイルを変えて現在に至っている。今回の調査の協力者は12名のアーティストであり、限られた事例ではあるものの、子育てと制作を両立する上でどんな点を困難だと感じているのか具体的な話を聞かせてもらうことができた。これらの声をもとに、今後FASにできることは何かを検討しながら事業を進めたいと思う。また協力していただいたアーティストが、今後どのように考え変化していくのか、引き続き見守っていきたい。